

発達障害のある子どものペアレント・トレーニングに関する研究(1)

- 指導プログラムの流れと精神健康度の変化 -

松下美加子 ・ 井上雅彦 ・ 岡嶋尚子 ・ 岸下弥生
(篠山養護学校) (兵庫教育大学) (大阪府立子どもリハビリテーションセンター) (発達教育研究所アトム)

KeyWords: 発達障害児 ペアレント・トレーニング

目的

子どもの行動変容のため親を治療者として訓練するペアレント・トレーニング(親訓練)は、1960年代前半からアメリカを中心におこなわれるようになった。わが国では1980年頃から国立肥前療養所において、個別や集団での親訓練が開始された。それはHPST(Hizen Parenting Skills Training program)と呼ばれている。HPSTプログラムは、子どもの生活技術の獲得と問題行動の減少、親の養育技術の獲得、親のストレスと抑うつ減少に効果的であり、プログラム終了後も効果が持続することが報告されている(免田・伊藤・大隈・中野・陣内・温泉・福田・山上,1995)。本研究では、免田ら(1995)の先行研究を参考にして、より多くの親が参加できるペアレント・トレーニングプログラムを開発し、その効果について検討する。(1)では主として、指導プログラムの流れと精神健康度の変化について検討することを目的とする。

方法

1. 対象者: A大学公開講座「発達に気になる子どもの家庭療育の方法」に参加した保護者32名(父親4名、母親28名)を対象とした。

2. 指導プログラムの概要: プログラムは、週1回2時間で全9回行われた。前半の1時間が全体での講義、後半の1時間は小グループでの演習とした。各回につき講師1名、グループ演習のためのスタッフ5~8名で行った。

(1) 講義内容

講義の内容は応用行動分析(ABA)に基づきながら、行動変容法の技術的・技法的な点のみならず、日常生活に即したテーマをとりあげた。各回の講義内容についてTable 1に示した。

Table 1 講義内容

第1回	オリエンテーション・総論
第2回	サポートブックを作ろう
第3回	余暇を広げよう
第4回	家庭生活を広げよう
第5回	保護者と学校との連携
第6回	問題行動の理解と対処
第7回	性の問題と性教育
第8回	きょうだいの心理的支援
第9回	まとめ

(2) グループ演習

第2回~第9回までの全8回実施した。各回の内容はTable2に示した。サポートブックとは、ボランティアの人が初めて子どもに接する場合の手助けとなるように、子どもの障害の実態や一日の生活(食事、排泄、更衣、コミュニケーションのとり方、余暇・遊び、こだわりやパニック等)支援の方法を具体的にわかりやすく表記したものである。携帯しやすいように、また補充や差し替えがしやすいように、はがきの大きさのカード式とした。サポートブックの作成は、第2回の講義で記入についての説明を受け、対象者各々がサポートブックへの記入を進めた。また、グループ内で記入し

たサポートブックをお互いに見せ合い、よりよいサポートブックをつくるために意見の交換をした。また、5回~9回では、対象者自らが立てた目標について1週間の間家庭で実際に取り組み、それを記録用紙に記入していった。次回、スタッフがその課題の達成率を算出しその結果により、課題の達成、課題の継続、課題の見直しという方向性をアドバイスしていった。この詳しい手続きは(2)で述べる。

Table 2 グループ演習内容

第2回	サポートブックの作成
第3回	サポートブックの作成
第4回	サポートブックの作成
第5回	目標設定シートの記入
第6回	てつぎ作成表と記録用紙の記入方法の教授
第7回	課題別グループでの話し合い
第8回	課題別グループでの話し合い
第9回	課題別グループでの話し合い

(3) 対象者の精神健康度

対象者の精神健康度に関する評価はGHQ30を用い、本プログラム参加前と参加後に実施し得点の変化を調べた。

結果

対象者32名の9回の平均出席率は80.6%であった。9回連続出席者は9名、8回出席者は11名、7回~5回の出席者は9名であり、4回~1回の出席者は3名で、途中より連続しての欠席者は2名であった。対象者の精神健康度の変化については、GHQ30で、「社会的活動障害」の要素の事前事後平均得点について1%水準で有意な差がみられた(片側検定: $t(21)=2.85, p<.01$)。また、全体得点合計の事前事後の平均得点については5%水準での有意差がみられた(片側検定: $t(21)=1.89, p<.05$)。

考察

本研究では、「発達に気になる子どもの保護者」を対象として募集し、子どもの年齢制限を設けず障害名も問わなかった。本研究は、免田ら(1995)の先行研究の対象者9名に比較して32名という大人数で実施したにもかかわらず、免田ら(1995)の研究での平均出席率と近い数値が見られた。これは本プログラムの妥当性を示すものと考えられる。本プログラムの事前・修了後では、GHQ30の平均得点が有意に減少した。このことは、本プログラムが親の精神健康度を改善させる効果があったことを示している。また開始前、高得点(18点以上)だった対象者は3名いたが、その中で得点が最も高かった対象者(21点)は最後まで1度も欠席することなく参加した。このようなGHQ30での評価が高得点の対象者に関しては、個別的な配慮が必要と考えられる。スタッフが個別的に支援しながらグループ演習等で孤立しないように、またいつでも疑問や質問に答えられるようにしたり、書き込みの作業をサポートしたりすることがドロップアウトの抑制に効果的であると思われる。

MATSUSHITA Mikako INOUE Masahiko
OKAJIMA Naoko KISISITA Yayoi

